

近世、近代における「～的」の文体史的考察¹

李 長波

1. はじめに

「～的」という中国語俗語からもたらされた言葉は、江戸時代では、江戸時代になって刊行された訓点本の唐・宋の儒家語録類、白話小説の翻訳、そして、それに先行した白話文献という、三つのルーツを持っている。その影響の及ぶところは、江戸時代の洒落本²から小説類³、近世の俗語まで、明治時代に至っては、西洋語の翻訳語として新たに成立したものが、日本語の書き言葉のみならず、話し言葉としても用いられるようになった。そしていまや日常的に使用頻度が高く、更に新たな用法まで派生させているように、旺盛な生産性を持つものである。これまでの先行研究は、江戸時代における「～的」の受容については、概ね堀口和吉 1992 において論じつくされた感があり、明治二十年頃までの「的」の使用実態については、山田巖 1961 や広田榮太郎 1969 などによって詳しく論じられている。これらの優れた先行研究に対して、本稿は、①と③と④のように先行研究においてまったく言及されなかったり、あるいは②のように調査対象になっていても調査が不十分であった以下の四点の文献について調べた結果をまとめたものである。

①荻生徂徠訓点『官刻六論衍義』，武江 [江戸]：出雲寺和泉掾外五軒の出版、享保 6 [1721] 年。

享保から宝暦 (1716～1764) にかけて流行した白話小説のうち、「的」を用いるものの刊行に先駆けて刊行されていたこと、その中には、すでに後の白話小説の翻訳における「的」の訳の基本的な型がすべて現れていることが特に注目値すると

¹本稿は平成 16 年度より交付を受けている科学研究費基盤研究 (C)「中国語口語との関わりを中心とした中世の仮名法語と禅宗抄物の文体史的研究」の関連の一部である。内容は、拙稿 2004 に続くものである。

²堀口和吉 1992 は、天明八年刊『曾我糠袋』中の「豪傑」を例に挙げている。

³前田勇 1960 では、安政 4 年～文久 2 年刊『七偏人』にある「家主てき」(初編下)、「神主てき」(二編上)、「車力てき」(五編下)などの例が指摘されている。

ころである。

②松本萬年『新橋雜記』（初編），明治十一年八月出版。

③松本萬年『新橋雜記』（二編），明治十一年十一月出版。

これまでの先行研究は、主に『新橋雜記』（初編）から用例を採集したに留まっていたが、本稿は更に『新橋雜記』（二編）まで調査の範囲を広げ、中から、『官刻六論衍義』や白話小説類に通じる「的」の訳の型を示す用例を発見した。

④山成哲造譯『和氏授業法』，明治十二年三月文部省印行。

原本：A. Holbrook *The Normal: or Methods of Teaching*, 1869.

本書は、明治十二年という西洋語の翻訳語としての「的」が流行しだした時期にあたり、その用例を網羅的に調査した結果、訳語「的」が更に「～様」、「～上」などと競合関係にあったことを示す用例を発見した。内容的には、ほとんどすべての学問の分野に及び、學術用語の訳語が数多く含まれており、明治十四年刊の『哲學字彙』に先行するものとして重要である。

2. 江戸時代における「的」の輸入——『六論衍義』の場合——

「的」そのものは、中国語では、表記の異なる「底」も含めて、古くは唐の時代にすでに中国側の俗語文獻に登場したものであるが、それを用いたもので日本に伝わってきた主な文獻は、禪宗の語録類、儒家の語録類がある⁴。しかし、禪宗語録には概ね「底」と表記したために、「～底（ノ）」として中世から近世、明治時代にかけて日本語の連体修飾節として用いられるようになった⁵のに対し、「的」を用いる儒家の語録類のうち、朱子語類と二程全書の和刻本は、いずれも江戸時代に入ってから刊行されたものである。その孰れをとってみても、享保から宝暦（1716～1764）にかけて流行した白話小説の流れのなかでも、その最初期の享保六年に刊行された荻生徂徠訓点『官刻六論衍義』のなかの話し言葉の質と量に及ぶものではない⁶。

2.1 書誌：

『六論衍義』の原本については、東恩納寛惇 1924、和田清 1925、石崎又造 1936 に

⁴例えば、代表的なものとして、『朱子語類大全』の和刻本は、萬曆三十二年刊本の翻刻本として、寛文 8 年（1668）京都の山形屋が刊刻したものが最初であり、『二程全書』は、校點者不明の無刊記本は、寛文 10（1670）年の書林目録にはすでに掲載されている（吉田公平『二程全書解題』（中文出版社出版・廣文書局印行『二程全書』、1-7 頁）を参照）ところから、やはり寛文年間より遠く遡れるものではないと思われる。

⁵拙稿 2003、2004 を参照。

⁶石崎又造 1936 によれば、「徂徠點本は日本に於ける支那語學史上から云へば、俗語譯としては寶永二年青心閣の『覺後禪』（肉蒲団）に次ぐ古板である」（65 頁）という。近世における中国語俗語の受容については、『覺後禪』（肉蒲団）の翻刻も無視できないが、それについては別稿に譲りたい。

詳しく述べられているところを整理すると、以下のようである。

【由来】：

和田清 1925 の調べたところによれば、六諭衍義のもととなる六箇条の聖諭は、明洪武廿一年三月十九日戸部尚書郁新等が太祖の聖旨を奉じて宣布した教民榜文四十一ヶ條中自治章程の一條であつて、その原文は萬曆七年十月巡撫保定都御史張鹵が校刊した皇明制書の中に輯録されてあるという。其の制度は毎郷每里に木鐸一箇を備へ、里内の老人廢疾の者或は瞽者を選んで、小兒に導かせ、鐸を持って毎月六回里内を回って広く宣伝させたもので、その教諭は第一孝順父母、第二尊敬長上、第三和睦郷里、第四教訓子孫、第五各安生理、第六毋作非爲の六箇条である。それを、明末会稽の人范・という村学究が、六諭の意を白話で通俗的に解説敷衍し、毎項律令の条文を引証し、また適当な例話を挿入し、各章の末尾に詩を附し、全章の大尾に総詩を加え、名付けて六諭衍義とした。著者自身の序跋がついているが、ともに年次を欠いているために、著作年代を知ることができない。

【徂徠点】：

東恩納寛惇 1924 と東恩納寛惇 1942 によれば、享保 6 年、將軍吉宗をはじめ室鳩巢に、『六諭衍義』の和解及び訓点を命じたが、原文は俗語を使用したはなはだ難解な書であったので、鳩巢が拝辞した。そこで改めて徂徠に命じられた。徂徠が台命をうけたのは、九月十五日で、早速点註を施して其月の廿二日に復命した。吉宗はたいそうご満悦だったらしく、序文も徂徠が書くことになった⁷。

【刊本】：

『刊刻六諭衍義』は、享保 6 年 10 月荻生徂徠序・康熙 47 年廣陵の竺天植序・范・自序・同人跋及び康熙 45 年琉球國正義大夫程順則序があつて、享保 6 年 11 月江戸書林：須原屋茂兵衛・出雲寺和泉掾・小川彦九郎・西村市郎右衛門・大和屋太兵衛・野田太兵衛の出板にかかる。東恩納寛惇 1942 によれば、徂徠点本に、一冊本と二冊本との二種がある。流布本は美濃版の一冊本で、二冊本は珍しいという。

【文体】：

一般庶民教化の主旨に沿って、白話を以て通俗に平易に説明したものであるので、『六諭衍義』は明末当時の広い範囲に分かって通用することが可能な口語体を忠実に伝えた

⁷ 徂徠の点註が成ったのを受けて、吉宗が改めて室鳩巢に徂徠点本をもとに和解を命じたところ、享保 7 年 3 月上梓、翌 4 月に『官刻六諭衍義大意』の出板となった。鳩巢大意本は最初官板として印行され、その後板を書肆に下賜された。徂徠本もやはり下賜されたが、鳩巢本は官板よりも賜板がむしろ多いのに反し、徂徠本の賜板本が数少ない。それは大意本に圧倒されて、あまり流布しなかったためと、東恩納寛惇 1942 は推測する（東恩納寛惇 1942：28 頁を参照）。

ものとして、中国語史の資料としての価値は高い。しかも文章は婦女子にもよく覚えられるように口調よく口語で韻を整えるなど、種々の工夫がなされている。したがって、実際朱子、二程の語録はおろか、いわゆる白話小説の類よりはずっと口語的な表現として質の高いものになっている。そのために、中国俗語の語彙と文法を如何に従来の漢文訓読の方式でもって訓むか、訓点の難しさも想像に難くない。荻生徂徠の創意も自ずからその訓点に伺われる所以である。

2.2 「的」の訓法：

徂徠本『六論衍義』の「的」の訓法を整理すると、以下のようになる⁸。

A 名詞又は代名詞+的

止房中ノ妻兒ハ是 自己的 ナリト知り、「孝順父母・二」

A' 名詞又は代名詞+的+名詞

大約父母ニ孝順ナルニ、兩件ノ事有 [ル]。一二ハ 父母のノ身 ヲ養ンコトヲ。一二ハ 父母のノ心 ヲ安ンセンコトヲ。「孝順父母・三」

人縦ヒ 父母のノ恩情 ヲ知ズトモ、但自己ノ兒子ヲ養 [フ] ヲ看ハ便是ナリ。「孝順父母・一」

又側室所生のノ兒子ノ、止タ 自己のノ生母 ヲ敬重スルコトヲ知テ、或ハ正經ノ嫡母ヲ把テ忤逆不孝スル者有 [ル]。

B 用言+的=名詞句

B' 動詞+的

那一箇力は 父母生成スルの ナラザラン。「孝順父母・一」

B'' 形容詞+的 争奈カセン 孝順的 ハ少ク、不孝順的 ハ多 (イ) コトヲ。「孝順父母・一」

C 用言+的+名詞=名詞句

C' 動詞+的+名詞

自己兒子ヲ養活スルのノ効勞 ヲ知道セハ、便 父母自己ヲ生長スルのノ恩愛 ヲ知ン。
自己兒子ヲ責成スルのノ心腸 ヲ知道セハ、便 父母自己ヲ指望スルのノ主意 ヲ知ラン。
「孝順父母・一」

C' 附：前置詞句+的+名詞

一生ノ經營計算那一時那一件是 兒子ノ爲ニスルのノ心腸 ナラザラン。

⁸分類は中世仮名法語や他の文献との比較をするために、拙稿 2003 で「底」の用例調査に用いたものを踏襲し、適宜不足を補った。

C” 形容詞+的+名詞

這是他ノ性中ニ 孝順的ノ良心 有ルコト没キナラズ、「孝順父母・一」

若 賢孝的ノ妻子 二遇着スルハ、就チ是家門ノ幸ナリ。「孝順父母・二」

D 動詞+的=得

半載周年ニシテ人ノ面目ヲ 認的 スレハ、父母ノ懷中ニ在テハ、便喜ヒ、別人抱キ去レハ便啼ク。「孝順父母・二」

まず、上記4つの型については、「A 名詞又は代名詞+底」のうち、「名詞+的」の用例が挙げられていないが、これは実際にある表現にも拘わらず、全巻を通して見あたらない。次の例はあるいは「名詞+的」として処理することも可能なものである。

他ノ祖墳ノ上ニ論祭ノ碑有 [リ]、放牛的 二推シ倒シラル。「和睦郷里・八」

この場合、「放牛的」の左訓に「ウシカヒ」と意訓を示したのは、徂徠もその一語としての資格を十分認識していたことの現れとみてよい。そして、以上のような4つの型のうち、Dは通常「得」と解される同音漢字の代用なので、連体修飾の「的」又はそのバリエーションとして認められない。

全体的には、「～的」で受ける名詞句、形容詞は音読を主とする傾向にあり、動詞句を受ける「～的」は概ね「～スル的ノ」に訓まれているが、例えば、次の例のように、「動詞句」をそのまま音読したものも少数ながら見られる。

天晴ル的 ノ日子多ク、下雨的 ノ日子少シ。「和睦郷里・八」

この例に見るように、「天晴的」と「下雨的」は同一の構成を成しているにもかかわらず、訓と音に訓み分けているのは、読み下し文に変化をもたらそうとしているようにも考えられる。そして、四字熟語もその語構成に即して訓む場合と、音読に訓む場合に分かれる。

全ク一點ノ 至誠哀慕的 ノ真心ヲ要ス。「孝順父母・六」

人 自私シ自利スル的 ノ心腸ヲ絶了センコトヲ要ス。「尊敬長上・三」

さらに、ここで注目したいのは、「用言+的+名詞」の型のうち、「動詞+的+名詞」の型は、多く「～スル的ノ+名詞」に訓まれていることである。これは当然中世の『傳光録』、白隱禪師の一連の仮名法語に見られる「底」と表記され「的」の前身をなす語法と、『二程全書』の訓法に則ったものであろう。以下一例ずつ挙げておく。

タトヒ見聞アリ覺知アリトモ、ツキニ去来ニアラズ、動静ニアラズ、カクノゴトク見得スル、スナハチコレ心ヲ知得スル底ノ漢。ナホコレ聞解トイヒツベシ。瑩山紹瑾

『傳光録・第五祖提多伽尊者』

禪門向上の事に到て、年來疑團あらむ人々は、大ひに手を拍して大笑する底の大歎喜有らむ。白隠禪師『夜船閑話序』

天民云者蓋是全盡得天生斯民底事業。

天民と云ふ者は蓋し是 全く斯の民を天生する底の事業を盡し、天の斯の民を生するや、將に道を以て斯の民を覺らんとす。『二程全書・卷二』（無刊記本）

しかし、これはただ連体修飾節に現れるという同一の環境によって類推されたものとするよりは、徂徠にとっては、「底・地・的」は結局同一の語であるという認識が背後にあったものと考えられる。それを裏付けるのは、写本のみ伝わる『譯文筌蹄後編』の以下の記述である。

「底」「的」「地」ハ三字トモニ、物ヲ指ス辭ナリ。倭語ニ、カウカウシタノデゴザル、カウカウアルノヨナニナニトシテトイフ、此ノ「ノ」ノ仮名ニアタルナリ。雅語ノ「者」ノ字ト相似タリ。此ノ三字、元來一字ナリ。元來「何等」ヲ略シテ「等」ト云ヒ、「等」ヲ轉ジテ「底」トシ、「底」ヲツメテ「地」トシ、「地」ヲ又ツメテ「的」トス。（国会図書館蔵『譯文筌蹄後編』卷五「助語下」）

ここでは、「何等」を轉ジテ云々はもちろん誤認であることを除けば、『底』『的』『地』ハ三字トモニ、物ヲ指ス辭ナリ」のように、「物ヲ指ス辭」と『底』『的』『地』がそれの受ける節を反射的に指すことを指摘したところは、徂徠の鋭い語感とそれに基づく三者の意味機能の規定の妥当性を伺わせるのに十分である。

3. 明治時代における「～的」の受容

3.1 大槻文彦の証言

大槻文彦の証言によれば、「的」を英語の翻訳書に用いることを発案したのは、大槻文彦も加わっていた、洋学書翻訳者の仲間であるという。

明治維新の初に、何んでもかでも、西洋々々で、翻譯流行の時があつた。諸藩で大金を出して、洋學書生に、何原書でも翻譯させた。其頃、拙者が知ツて居る人々で、善く翻譯をして居たは、柳河春三、桂川甫策、黒澤孫四郎、（河津祐之の事）、箕作奎五、（菊池大麓君の兄さん）、熊澤善庵、其他、某々等であつて、拙者なども、加はツて居ツた。さうして、不思議な事には、此仲間が、大抵支那の小説、水滸傳、

金瓶梅などを、好んで読んで居た。或る日、寄合ツて雑談が始マツた。其時、一人が不圖、かやうな事を言ひ出した。System を組織と譯するはよいが、Systematic が譯し惡くい。tic といふ後加へは、小説の^{アトクハ}的^{テキ}の字と聲が似て居る。何んと、組織的と譯したらば、どうであらう。皆々、それは妙である、やツて見やう。やがて、組織的の文で、清書させて、藩邸へ持たせて、金を取りにやる。君實行したのか。うう。それは、ひどいではないか。何に、氣がつきはせぬよ、などといふ戯れであツたが、^{アトクハ}此^{テキ}的の字で、度々、むづかしい處が切り抜けられるので、遂に、嘘から眞事といふやうな工合で、後には、何んとも思はず、遣ふやうになツて、人も承知するやうになツたが、其根を洗へば、tic と^{テキ}的が、聲が似て居るからといふ事で、洒落に用ゐた丈の事で、實に抱腹すべき事である。是れが、^{テキ}的の字のそもそもの原因である。「文字の誤用」(東京教育會演説明治三十四年七月)(282頁)

これは先行研究にはよく言及される「^{テキ}的」のそもそもの由来であるが、ここで以下のことに注目したい。

一、「tic といふ後加へは、小説の^{アトクハ}的^{テキ}の字と聲が似て居る」ことが発案のきっかけである点⁹。

二、「^{アトクハ}此^{テキ}的の字で、度々、むづかしい處が切り抜けられる」という点。

さて、一は発案のきっかけであり、それはそれで歴史的な事実を語っているのであろう。しかし、この証言の意味するところは決してただ単に「洒落」に終わらないものがある。それは例えば、「中国語の助辞の用法にならって、明治初期の翻訳文のなかで、英語の-tic などの形容詞的な語の訳語として二字の漢語につけて用いられ出してから、学術的な文章などに多く用いられる」(小学館『日本国語大辞典』(第二版)第九卷、平成十三年刊)という現代の辞書の記述がその間の消息を如実に示している。これは、「^{テキ}的」が単なる音が似ている以上に、英語の「形容詞的な語」の訳語として実際必要とされていたこと、つまり当時の漢文訓読調を主とする普通文の文体のなかで、漢語系の語彙の連体修飾又は形容詞的な語としての不備を補うものであったことを意味するのである。大槻文彦が「^{アトクハ}此^{テキ}的の字で、度々、むづかしい處が切り抜けられる」云々も、その意味において理解される必要がある

そして次に留意する必要があるのは、先の注に引用しておいたが、実際大槻文彦の証

⁹ 広田栄太郎 1969 は、三宅雪嶺の『同時代史第一巻』(昭和二十四年)の明治三年の条、柳河春三の「中外新聞」のことに関連した注記で、大槻文彦が名前を伏せたところの人物を柳河春三と特定していることに言及し、「これらの人々の著書にあたって、多少調べてもみたが、現在のところ、まだ「^{テキ}的」を使った用例に出会っていない」という(285-286頁)。

言通り、明治の初めの大槻文彦らの洋学書翻訳者の仲間の著作からは、いまだに「的」の実例が報告されていないことである。これはかならずしも大槻証言の信憑性を疑うほどのものではないが、「的」の発生をもっぱら大槻等のグループに求めるためには無視できない問題である。しかし、先に触れたように、たとえ「的」が洒落から出たものではあっても、実際漢文訓読体を主とする書き言葉の文体にとって必要なものであったために生み出された訳語であり、それは漢語の文体上のある種の「不備」を補うもの、英語などの西洋語の形容詞の用法の難しいところを伝えるのに必要なものであってみれば、同じような問題意識を持つ人は、別に大槻等のグループに限ることはないはずである。してみれば、着想として記録に残っているかぎりでは、最初の発案者は大槻等のグループの一員であったことと、「的」が一般的に用いられ、流行するまでにいたったこととの直接的な因果関係とは、やはり分けて考えなければならない。というのは、ほぼ同時代の他の人たちも実際同時多発的に同じ着想を得ることは十分考えられるからである。事実、明治時代に「的」を用いた最初の用例は、山田巖 1961 によれば、西周の「政略論」¹⁰と中村正直の「西學一斑」次のもののようである。

今政事學ト政略トノ關係ハ此兵家ノ戰法ト戰略トノ關係トモ異ナリテ、全ク觀察的ト實行的トノ區別ナリトシ、又一ニハ道具立ヲ知ル事ト道具立ヲ用ユル事トノ關係ナリトス。西周「政略論」

前二述ヘタル如ク衣食住ヨリ錢貨等ニ至ルマテノ外物的ヲ富饒ニ得ル幸福ト¹¹
一派ノ學アリテナチユラルヂユルスプレデンス猶曰天然的律法ト稱スルモノ格羅丟去斯
コレヲ創メタリ。「西學一斑」中村正直譯『明六雜誌』第十號、明治七年六月刊。
如此キ題號ヲ掲ケハ其主論ノ如何タルヲ論セス人々其心裏貪知的ノ性ヲ攪動シテ見ム
ト欲シ聞カムト欲シ其秘密タル如何ヲ知ラムト欲シ其意思ヲ發揮スルコト猶痛痒ノ撫
搔ヲ要スルカ如シ。西周「秘密說」『明六雜誌』第十九號、明治七年十月刊。

これらの用例のうち、特に前の二例と第 4 例は山田巖 1961 も認めているように、「名詞的なにおいの濃い」であるが、『明六雜誌』第十号の例は、「はるかに現代語らしい用い方である」（山田巖 1961：58 頁）。西周と中村正直と大槻等のグループとの接点は詳かにしないが、大体明治六年から七年にかけて、徐々に「的」の用法が広がっていったものとみて間違いなさそうである。そして、山田巖 1961 は、明治七年から明治十二年までの学術的な翻訳書・論文から次のような例を挙げている。

¹⁰ 麻生義輝『西周哲学著作集』改題によれば、この稿本の著作年代は明治五、六年前後という（山田巖 1961：58 頁）。

¹¹ 実際、大久保利謙『西周全集第一巻』解説で、この稿本の著作年代は明治十年前後まで引き下げてよいという（山田巖 1961：58 頁）。

生理的試験法（島田脩海譯『消毒新論』、明治七年）

何的（同上）

^{ソデクヨロリン}曹達の塩酸（清水卯三郎譯「化学改革ノ大要」『明六雑誌』第二十二号、明治七年）

^{オウリオムヨロリン}黄金的塩酸（同上）

健康的ノ情感（千葉繁譯『造化概論』乾、明治八年）

勸奨のアラサレハナリ（林董譯『彌兒經濟論』初篇・卷之四、明治九年）

不便的ヲ補フ（同上、初篇・卷之五、明治十年）

^{なるたけ}可及的（松山棟庵・森下岩楠譯『初學人身窮理』上卷、明治九年再々刻）

必要的ノ事（土井光華・萱生奉三譯『英國文明史』第一編、明治十二年）

自由的ノ一物（同上）

これに対し、広田栄太郎 1969 は、文部省『百科全書』（明治六年～明治十六年）によって、さらに次の数例を補った。器械的ノ規則（坪井爲春譯『医学篇』、明治七年二月）

器械的ノ作用（同上）

可及的捷手（同上）

※ほかに、「器械的」5 例。

何的沈溺（錦織精之進譯『養生篇』、明治七年四月）

化学的引力（小林義直譯『化学篇』、明治八年三月）

化学的複体（同上）

化学的分析（同上）

※ほかに、「化学的」7 例。

化機的聚合質（坪井爲春譯『蜂蜜篇』、明治九年七月）

器械的ト化機的トノ兩能（同上）

解剖的及ヒ生理的ノ性質（同上）

慢々の二燒散シ（松岡隣譯『食物篇』、明治九年八月）

機械的ノ不潔物（同上）

化学的ノ成分（同上）

化学的ノ反應（同上）

^{ナルタケ}可成的速二（同上）

化学的作用（柴田承桂譯『地質學』、明治九年九月）

化学的現象（同上）

器械的作用（同上）

有層的（鈴木良輔譯『鉦物篇』、明治九年十月）

無層的（同上）

可及的相接近駢列スヘク（柴田承桂譯『果園篇』、明治九年十月）

脂的樹（坪井爲春譯『養樹篇』、明治九年十月）

器械的混合（河村重固譯『給水浴澡掘渠』、明治九年十月）器械的方法（同上）

健康的須要（同上）

協同的設備（同上）

※ほかに、「化学的」5例、「器械的」1例。

可及的遲速（錦織精之進譯『金類及鍊金術』、明治九年十二月）

緊要的ノ事（柴田承桂譯『古物學』、明治十年二月）

武勇的信教（同上）

可及的確正ナル所ノ時計（永井久一郎譯『水運篇』、明治十年七月）

・暇有致の人（大井鎌吉譯『花園篇』、明治十一年一月）

ブルタルイグノレンス
禽獸^的ノ無知識淺陋ナルヨリ（秋山恒太郎譯『接物篇』、明治十二年十一月）

ヲノレーブル
貴重的ノ競治魂（同上）

以上の例をふまえて、広田栄太郎 1969 は、

「的」という語は、明治十年前後から、人文科学・自然科学を問わず、翻訳を主とした学術書・論文のなかに、かなり使われている。当時この種の文章は、おおむね漢文書き下しの硬い文体を採ったから、「的」という語も、多くは硬い文章のなかに見いだされるのである。したがって談話体で書かれている、当時のいわゆる小新聞などには、硬い感じの「的」という語はほとんど使われていない。また、「的」の上下にくる語もほとんど漢語に限られ、連体修飾語として、直接あるいは助詞「ノ」を伴って下の漢語に付く場合が大半である。「ナ」「ナル」という活用語尾のものはほとんどないといってもよい。（295頁）

と結論づけている。蓋し明治十年前後の「的」の実態を正確にまとめたものであろう。敢えて補うとすれば、「可及^{ナルタケ}的」、「可成^{ナルタケ}的」、「慢々^{ナルタケ}的」のように、連用修飾に用いられるものが含まれていることぐらいであろう。

以上は、同じく文部省印行にかかる、山成哲造譯『和氏授業法』（明治十二年三月）までの「的」の使用状況の概観である。次に、山成哲造譯『和氏授業法』とほぼ時期を

同じくする日本漢文の例を、『新橋雜記』によって見てみたい。

3.2. 『新橋雜記』の用例

松本萬年『新橋雜記』（初編）は、『新橋雜記』（二編）は、明治十一年十一月の出版である。これは厳密な意味での日本語の文章ではないが、「的」の由来を示す翻訳書以外の文献として、重要なものである。用例は以下のとおりである。

- ① 妓們相顧ミテ道フ、那ノ客ハ 毎讌坐長的。^{イツモナガイネズ}『新橋雜記』初編・六
- ② 班兒道フ、真箇^{マコトニクマラナイネ}不忍住的。^{デス}『新橋雜記』初編・十二
- ③ 妓揖一揖答へ道フ、妙法樣的。^{デス}『新橋雜記』初編・十五
- ④ 賤妹力是レ 阿媽身上二靠在シテ過活スル的、姊們ト殊ナリ。『新橋雜記』初編・十六
- ⑤ 乙妓交情、黙止スルヲ得ズ、甲妓ヲ挽キ廊隅ニ到リ、説キ道フ、那ノ客モ也タ是レ 情ヲ知り趣ヲ識ル的、恁早札ヲ遞シ、償金ヲ要求セハ、奈何ン。甲妓頭ヲ揺カシテ變ノ卦ヲ説キ起シテ道フ、罷々、他果シテ是レ 情ヲ知り趣ヲ識ル的、便他ハ我夥主顧^{ワタイタチダトクイ}、些ノ首飾ヲ愛シ、這ノ鄙淋之言ヲ出ス、頗ル我夥ノ體面ヲ破シ、『新橋雜記』初編・十六～十七
- ⑥ 花洲ナル者、今春^{シンニチ}横街ニ住シテ在リ、年已ニ三十、雛妓呼ブニ伯娣ヲ以テシ、遊客ハ戲レニ^{バアサン}嫗娘ト称ス。容姿醜美中間ニ在リ、這ノ個ノ花姫、敗花殘柳ニ屬スト雖、是レ^{ババアデモ}伶利^{トリ}轉幹^{マワシ}ヲ^{シガ}善スル^{ヨク}的^ナナラズ。皆呼ブニ穩當人^{オコロヨシ}ヲ以テス。『新橋雜記』初編・十九
- ⑦ 一人道フ、否々、這ハ是 榎木坂ニ住スル的。一人道フ、是禿頭痘疤ト説ク、應サニ果シテ學農那邊ニ在テ住スル人ナルベシ。『新橋雜記』初編・二十三
- ⑧ 卿儻シ 情ヲ識り趣ヲ知ル的 ナラハ、俺レ卿力^{イロ}意中ノ人ト^ニ做ラント聞キ得テ、阿綾微笑シテ道フ、妾ハ是歌妓、私窠子ニ非ラス、『新橋雜記』初編・二十三
- ⑨ 客ハ是香ヲ憐ミ玉ヲ惜ム^{イロヲトコ}標致蕭郎、相親昵スル已ニ幾回的、綠樽酒冷カニ、銀燭焰昏ラシ。『新橋雜記』初編・二十三
- ⑩ 這ノ時客醉眼朦朧中ニ在リ、應へ道フ、理會得的、口中?々、復一語無シ。松本萬年『東京新橋雜記』第二編・七
- ⑪ 俺レ 昔日娘子ト密語スル的ノ事有、娘子枉ケテ依允シ了セヨ、松本萬年『東京新橋雜記』第二編・十一
- ⑫ 難道^{ナンデヒトリヤフタリカハイイヒト}一二相愛的^ガ有ラザラン。松本萬年『東京新橋雜記』第二編・十三
- ⑬ 便チ應シ道フ、諾但^{シンル}宜ク姻戚交際ナルベキ^{イッソ}的^キ。松本萬年『東京新橋雜記』第二編・十四
- ⑭ 俺力意已ニ決セリ、俚言所謂毒ヲ喫セハ碇ニ及フ的、松本萬年『東京新橋雜記』第

二編・十六

⑮先生之二見レハ、是レ前日 嬌艶的 ナラズ、尋常ノ姿色耳、松本萬年『東京新橋雜記』第二編・十七

⑯婢二、那ノ妓ハ何處ニ在ル、来リ至ルノ速ナルヲ問フ、婢應ヘ道、烏森的 ト。松本萬年『東京新橋雜記』第二編・十七

⑰翌早纔カニ戸ヲ開ケハ便チ昨夜ノ細々ヲ叫ヒテ、門ヲ過ク、因悟ル、那ノ客ハ是レ新聞記者ナルヲ 的、松本萬年『東京新橋雜記』第二編・十八

⑱先生ハ本是レ 筆ヲ 012649 リテ風俗ノ淑慝ヲ記得シ、家國ノ治亂ヲ論斷スル的、粉黛影裏ニ在リト雖トモ、本分ノ表相ヲ露出シ来リ、松本萬年『新橋雜記』第二編・十九

⑲箱奴問ヒ道フ、今晚ハ甚所一個、嬌聲應ヘ道フ、茅場町ノ的、他ハ是レ極メテ客シ、松本萬年『新橋雜記』第二編・十九

⑳自ラ誇ル、俺ハ則趣キヲ識ル的、俺ハ則 情ヲ知ル的、俺則 巢窟ヲ穿ツ的 ト抑過テリ。松本萬年『新橋雜記』第二編・二十

以上の用例を用法別に分類すると、次のようになる。

A「～者」の意：④、⑤ 2 例、⑥、⑦、⑧、⑫、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳ 2 例。

B「～だ/用言の終止用法」の意：①、②、③、⑩、⑬、⑭。

C「～スル的ノ～」：⑪

以上の三つの用法のうち、A は、中国語の「的」のもっとも代表的な用法の一つで、「者」の意に用いられるものであり、全体的には一語として名詞の語性と資格を持っている。この用法は白話小説の影響と見て間違いない。B の「的」の用法は、恐らく文化十四年刊三宅橘園『助語審象』巻下にある、「的 マサニ ダト譯ス：成精的バケモノダ 粗鹵的ラチモナイ 老實的リチギ 有的アリタケ 腌臢的キタナヒモノダ 出名的ゼンセイ 呼呀歎乃的シツシサアサア 流水的スラスラト」にある、「マサニ ダ」との理解に沿ったものであろう。これはおそらく文末に用いられるのを常とする「～的」を含む文の意味を、「～的」そのものの意味と取り違えたための誤解であり、松本萬年『新橋雜記』の用例はすでに日本語化したもののようである。そして、残る C の例⑪は、先に見た、徂徠訓点『六論衍義』の連体修飾節に用いられる「～的（ノ）」の訓法を承けたものであり、紛れもなく明治十年代初めにおける「～的」の流行期と江戸時代の「～的」の訓法との関係を示すものとして、注目に値する。このように、一部すでに日本的な用法が派生したとはいえ、松本萬年『新橋雜記』はやはり日本漢文の域を出るものではない。明治十二年に時期を限れば、より日本語の文体として、用例の質量ともに重要

な文献はやはり『和氏授業法』である。

3.3. 『和氏授業法』の場合

先に、山田巖 1961、広田栄太郎 1969 に基づいて、明治六年頃から明治十二年にかけての、翻訳書、論文などに現れた「～的」の用例を整理しておいたが、それと次に挙げる用例を比較するまでもなく、『和氏授業法』の用例の豊かさが明らかである。

〔的〕

紀事的 epic (11p)

聚合的及各箇的 Collective and individual

動詞及非動詞的 Verbal and non-veral

拔萃的及凝結的 abstract and concrete

減省的及非減省的 Diminutive and non-diminutive (135p)

缺乏的 Defective

冗長的 Redundant

自達的 Transitive

不達的 Intransitive

通常の Ordinary

優暢的 Progressive (148-149p)

單的 Simple : 成全的 Complete・簡約的 Abridged

攪雜的 Complex : 重要的 Principal・附屬的 Subordinate

聚合的 Compound : 首領的 Leading・同等的 Co-ordinate

報告的 Declarative・命令的 Imperative・疑問的 Interrogative

重要的 Principal : 主語・講出詞主語 : 單的 Simple・攪雜的 Complex・聚合的 Compound

附物・接詞 Copula : 單的 Simple・攪雜的 Complex・聚合的 Compound (168-169p)

附屬的 Subord. : 形容詞的 Adjective・副詞的 Adverbial・實名詞的 Objective

副詞的 : 單的 Simple・攪雜的 Complex・聚合的 Compound

接續語 : 同等的 Co-ordinate・附屬的 Subordinate (170p)

性質二關ス : 實名詞的 Substantive・形容詞的 Adjective・副詞的 Adverbial (171-172p)

星的運行 sidereal revolution (341-342p)

参考 :

單純文章 Simple Sentence・成全文章 Complete Sentence・簡約文章 Abridged Sentence・聚合文章 Compound Sentence・首領文章 Leading Sentence・同等文章 Coordinate Sentence・攪雜文章 Complex Sentence(173p)・重要文章 Principal Sentence・附屬文章 Subordinate Sentence (174p)

攪雜文章トハ其緊要ノ部分トシテ成全的附屬文章 complete subordinate sentence ノ包有スル者ヲ謂フ (173p)

附屬元素トハ重要元素ヲ除クノ外其總元素ヲ言即形容詞的 Adjective、副詞的 Adverbial 及實名詞的 Substantive ノ者ヲ指シテ言ナリ。

形容詞的元素 Adjective Element トハ實名詞ヲ變形セシムル者ヲ謂フ。

副詞的元素 Adverbial Element トハ實名詞ヲ除クノ外其他ノ者ヲ變形セシムル者ヲ謂フ。

賓格的元素 Objective Element トハ自達動詞又ハ分詞ノ目的語トシテ用キラルル者ヲ謂フ。(175p)

報告的單純文章 a simple declarative sentence

報告的單純文章 a simple declarative sentence (178p) 單純形容詞的元素 a simple adjective element (178-179p)

單純形容詞的元素 a simple objective element (179p)

誤訳か報告的單純文章 a simple declarative sentence (179p)

攪雜形容詞的元素 a complex adjective element (179p)

攪雜形容詞的元素 (179p)

原文にないものを補う。單純形容詞的元素 a simple adverbial element (179p)

誤訳か攪雜副詞的元素 a complex adverbial element (179p)

攪雜副詞的元素 (179p)

原文にないものを補う。單純形容詞的元素 a simple adjective element (180p)

疑問的單純文章 a simple interrogative sentence (180p)

二箇ノ單純形容詞的元素 (180p) two simple adjective elements

單純賓格的元素 a simple objective element (180p)

攪雜副詞的元素 a complex adverbial element (180p)

攪雜副詞的元素 (180p)

原文にないものを補う。單純形容詞的元素 a simple adjective element (180p)

報告的攪雜文章 a complex declarative sentence (181p)

参考：兩箇ノ單純形容詞（的：正誤表によって補う）元素 two simple adjective elements (181p)・單純形容詞的元素 a simple adjective element (181p) 單純形容詞的元素 a simple adjective element (181p)

報告的單純附屬文章 a simple declarative subordinate sentence (181p)

接續詞的單純主語 the connective and simple subject (181p)

單純賓格的元素 a simple objective element (181p)

單純副詞的元素 a simple adverbial element (181p)

聚合副詞的元素 a compound adverbial element (181p)

聚合副詞的元素 (182p)

原文にないものを補う。單純形容詞的元素 a simple adjective element (182p)

報告的單純附屬文章 a simple declarative subordinate sentence (182p)

單純賓格的元素 a simple objective element (182p)

報告的攪雜文章 a complex declarative sentence (182p)

報告的（的：正誤表によって補う）單純附屬文章 a simple declarative subordinate sentence (182p)

報告的攪雜文章 a complex declarative sentence (183p)

單純形容詞的元素 a simple adjective element (183p)

報告的單純附屬文章 a simple declarative subordinate sentence (183p)

報告的攪雜文章 a complex declarative sentence (183p)

論理的報告上の首領文章 the leading logical declarative sentence (183p)

單純賓格的元素 a simple objective element (184p)

〔～的ノ〕

生徒未タ諳唱ヲ準備セサルカ爲メニ教師先ツ此目的ニ緊要ナル的ノ綱領表ヲ拔萃シテ預備ヲナス可シ。(255p)

然後又之ヲシテ教師ノ指命スル的ノ記號ヲ塗板上ニ記セシムルヲ要ス (373p)

指ヲ以テ輕々のニ地球儀ヲ撃ツ (345p)

指ヲ以テ輕々のニ之ヲ撃テ (346p)

縱令生徒ハ主意表ヲ携ルモ可成的之ニ依頼セサランコトヲ要ス。(246p) 参考：

右ノ方法ニ於テ此課若クハ總生徒ノ之ヲ負荷シ得ル的ヲ其學習ノ準備トシテ進歩セシム可シ。(374p)

以上の用例を通覧するに、まず、少数ながら「單的 Simple」、「接續詞的 connective」、

「實名詞的 Substantive」などのように、必ずしも二字の漢語にだけつくものではないことを指摘しておきたい¹²。明治六年頃から明治十一年までの用例にはない用法であり、或いは「～的」の用法の広がりとして見ることも可能であろうが、実際、連体修飾語としての機能的な一致はかならずしも漢語の字数と必然的な関係がないと考えるべきであろう。次の以下三つの点に焦点をしばって分析を進める。

一、「～的」の名詞的用法

二、「～的」の連体修飾的用法

三、「的」と競合関係にある語とその用法

一、「～的」の名詞的用法

先に触れたように、中国語の「～的」の用法のうち、名詞や代名詞に接して、「～ノ者（物）」という意味を言外に含む用法に一致するものであることに注目したい。これは、一方は徂徠点『六論衍義』、白話小説の訓読などによって、つとに江戸時代から日本人に親しまれたものであり、前田勇 1960 の指摘した、「かんてき」などの「的」として日本語化したものの意識が、このような用法を言語史的のみならず実際の言語感覚として支えているのであろう。そして、英語の形容詞の用法として、文脈的に明らかな場合において後接名詞を省略してもそれを言外に含めるものと軌を一にするものであることはいうまでもない。これを、中国語に即して言えば、助辞「的」の名詞的用法としてもよく、英語に即して言えば、「形容詞の名詞的な用法」としてもよい。

二、「～的」の連体修飾的用法

「～的」の連体修飾的用法も、中国語の「～的」の主な用法であるが、これについては、もし漢文であれば、漢語そのものの強い造語力によって、「的」の介入する余地がないところである。しかし、なぜ漢文読み下し文においてこのような「的」が必要とされるのであろうか。「的」が連体修飾節に用いられるものとしてなぜ日本語の文体に介入され得るのか、という問題もここにある。

ここで考えられるのは、漢文読み下し文としての日本語は、すでに漢文という原文から離れた、準日本語の文体としてあるという中間的な性格である。この中間的な性格は例えば、和文の文脈であれば、恐らく名詞と名詞との間には「の」を、用言と名詞との

¹² 単純形容詞の元素 a simple adjective element のような二次的な造成にかかる例を含めれば、その字数は更に増えるものもあるが、ここでは一次的な語構成のものに限る。明治十二年までの用例としては、「何的」があるだけである。

間には「用言の連体形＋名詞」によって表現されるであろうという、和文の側から見れば、むしろ異質な文体であろう。そして漢語持ち前の造語力はこのような中間的な文体において十分に発揮されることが許されないとすれば、これはもっぱらこの文体の和文からの異質性によるものではなく、むしろ漢文でも和文でもないという意味での中間的な文体として生長するためにはその持って生まれた欠点、いや不備ともいえる。その不備は、漢文読み下し文（これは従来の訓読の結果としてのみあったものからすでに変質したものである）を元にする明治時代の新しい文章語によって英語を翻訳するという、新たな表現の場において、特に英語の「形容詞の名詞的な用法」と「連体修飾節＋名詞」の構文において、露呈したのではないかと考えられる。和文、又は口語文の「～ノ」には、まず「的」の名詞的用法は、「代名詞＋的」の場合を除けば、とりわけ「用言＋ノ」の形において自立性と生産性に乏しいということは、それを和文の側から示唆していると考えられる。

三、「的」と競合関係にある語とその用法

「的」と競合関係にある語とその用法はまず、漢語を羅列する用法がある。例えば、
報告的攪雜文章 a complex declarative sentence (183p)

單純形容詞的元素 a simple adjective element (183p)

報告的單純附屬文章 a simple declarative subordinate sentence (183p)

このように、名詞に先行する修飾語が二つ以上ある場合、一つか三つ目のものにだけ「的」を付し、あとは漢語固有の造語力に頼るという方法である。これは現代でも法律用語、あるいは学術用語において盛んに用いられる用法であるが、明治十二年頃には、すでに漢語固有の造語力にのみ頼れるほど漢語の造語力に対する意識が薄れたのであろうか。もちろんこの「的」は多数ある修飾語のなかのより重要なものに付けられているところからみれば、むしろ漢語固有の造語力の限界、複数個の連体修飾語内部の関係が平面的な階層をなしがたいということを示していると思われるべきであろう。仮にこの3例の「的」を省くと、修飾語同士の階層関係が不明になることも、それを裏付けている。次に、管見のかぎり、『和氏授業法』のなかで、「的」と明らかに競合関係にある語：「様」、「上」を見てみる。次の例のように、「様」が「的」とまったく同じく用いられるものであったことは明らかである

〔様〕

實名詞様 簡約文章 Substantive Abridged Sentence・形容詞様 簡約文章 Adjective Abridged Sentence・分詞様 簡約文章 Participial Abridged Sentence・不定法様 簡約

文章 Infinitive Abridged Sentence・獨立様 簡約文章 Absolute Abridged Sentence (190p)

形容詞様 簡約文章トハ實名詞代名詞又ハ 實名詞様ノ 節 substantive clause ヲ變形セシメンガ爲メニ用キル者ヲ謂フ (190p)

獨立様 簡約文章トハ整語法ノ首領語ハ 主格様ノ 獨立格 nominative case absolute ナル者ヲ謂フ (190p)

以上の数例から見る限り、「様」と「的」の競合は、「的」の名詞的用法を除く、連体修飾の場合に限られているようである。そして、先に「實名詞的」、「形容詞的」と訳したものと比べれば、「様」と用いられているところは、すべて、本来はそうではないものがその様に用いられる場合に限られ、まさに比況の「様」がその意を尽くしているのである。してみれば、「～的＋名詞」と「～的＋ノ＋名詞」の場合はかかる比況の意味をまだ有せず、ほぼ「～の性質を有するところの～」の意であろう。

〔上〕

「上」が「的」と競合しつつ、同じく漢語固有の造語力の限界を補うものとして用いられる端的な例は、次のようなものである。

論理的報告上の首領文章 the leading logical declarative sentence (183p)

讀書上ノ知識 book knowledge ト實事上ノ知識 Real knowledge (221p)

邦制上ノ區別 Political Divisions (300p)

しかし、「～上」自身は、必ずしも「～ノ」を介さなければ、名詞に接し得なかったわけではない。次の例を参照。

文法上規則ノ採用法 Method of Introducing Rules : (44p)

算數上地理學 Mathematical Geography (258p)

このような接続の揺れは、恐らく「上」の文体指標としての不安定な身分を示していると考えられる。そして、つぎの例は、むしろ「的」の名詞的な用法と共通なものである。地理學：算數上 Mathematical・有形上 Physical・現像上 Phenomenal・總説上 Descriptive (255p)

しかし、これらの例はほとんどすべて抽象的な意味を表わす名詞に付く上であるが、「上」はもともとと方角を表す名詞であったことはもちろんそのまま踏襲されてもいる。

表面上ノ定限 Limits on surface (270p)

陸地上 Continental or excessive・島嶼上 Insular (270p)

海面上ノ高度 Height above the sea (271p)

地平上 Horizontal・鉛直上 Vertical (277p) 地平上 Horizontal・鉛直上 Vertical (279p)

水上ノ比例 proportion above water (296p)

大陸上ニ存在スル圓石 boulders on present continents (297p)

地球上 plane surface (327p) 地球儀上 the surface of the globe (327p)

地球表面上 on the earth's surface (330p)

其地軸上ノ自轉 its revolution on its axis (330p)

其軸上ノ回轉 that around its axis (332p)

地圖上 on maps (333p)

地球ノ表面上 on the earth's surface (334p)

地圖上 on maps (333p)

地球ノ表面上 on the earth's surface (334p)

海上ヨリ内地ニ至ルマテ on sea to interior (294p) 東西海岸上 on east and west shores (294p)

地球儀上 on the globe (346p)

地球上ノ海水 the water on the Earth's surface (359p)

石盤若クハ塗板上 on the slate or blackboard (376p)

などの如くである。因みに、同じく方角をあらわす「中」は特に、英語の前置詞 in の訳語に当てられたようである。つぎの例を参照。

〔中〕

熱帯中ノ草木 Torrid Flora・温帯中ノ草木 Temperate Flora・寒帯中ノ草木 Frigid Flora (276-277p)

熱帯中ノ動物 Torrid Fauna・温帯中ノ動物 Temperate Fauna・寒帯中ノ動物 Frigid Fauna (279p)

熱帯中 in Tropics Zone・温帯中 in Temperate Zone・寒帯中 in Frigid Zone (294-295p)

數學中 in Mathematics 不遇數ノ如キ (414p)

〔性〕

先に触れたように、「的」の用法としては、「～の性質を有するところの」という場合があり、それはまさに「～性」に対応するものである。以下は「的」と競合関係にある「性」の用例を挙げる。

集合物：必要性 essential・偶在性 accidental (269p)

太平洋ノ赤道性 Pacific equatorial・印度洋ノ赤道性 Indian equatorial・大西洋ノ赤道性 Atlantic equatorial (285p)

南大西洋性 South Atlantic equatorial (286p)

この「～性」は後の「社会性」のような名詞としてではなく、形容詞の訳語に当てられていることは特に注目に値する。というのは、これは「的」との競合関係にある時期の用例としてはいかにも当然な用法ではあるが、後にかかる用法はもっぱら「的」によって言い表わされるようになった結果、「～性」が名詞の用法に孤立してしまったと見るべきであろう。このように、「的」と競合関係にあるかすかすの語とその用法は、ほとんどすべて「的」の連体修飾的用法に固まっており、しかもその孰れも最終的には「的」の進出によって用法を制限されてしまったり、或いは「様」のように完全に日本語の文体から駆逐されてしまったりするものばかりである。これを裏返せば、「的」の勢いの盛んなことを物語っているといえよう。ちなみに、大槻文彦は、先に引用した「文字の誤用」において、「的」との競合関係にある語について、次のように述べている。

今の文に、「反抗的態度」などは、「反抗様態度」などといふやうな意に用ゐて居る。「軍事的設備」、は「軍事上設備」、「独逸的教育」は、「独逸 ruby 風。教育」、「学者的口氣」は、「学者 ruby 然たる。口氣といふやうに用ゐて居る。的の字を、かやうに用ゐるは、支那の官話小説に、常の事であるけれども、此の的に、「様」、「上」、「風」、「然」などいふ意は決して無い。支那の官話の文法を書いた「文学書官話」といふ書、(米国人、高第丕の著)に、的の字を説て、「不能説他是那一類の作甚麼字的末尾」とあつて、八品詞の何の類とも名づけることが出来ぬ、どんな字の尻にもつける、とある。「文字の誤用」(東京教育會演説明治三十四年七月)

ここでは、「様」、「上」、「風」、「然」を四つ挙げているが、「風」「然」については、『和氏授業法』には管見のかぎり見あたらなかった。「様」と「上」については先に見たとおりであり、特に「様」については、明治三十四年時点の大槻文彦の語感では、まだ「的」と互換性があるというのは、両者の競合関係がなお拮抗していたのではないかと考えられる。

4. まとめ

本稿は、先行研究においてまったく言及されなかったり、あるいは調査対象になっていても調査が不十分であった四点の文献を調べ、そのなかの「的」の用例を分析したも

のであるが、具体的な現象と用法の指摘以外の要点をまとめれば次のようになる。。

一、近世における「的」の受容については、「的」を大量に用いるもので、最初に訓読によって日本語にもたらした文献は徂徠点『六論衍義』であること。そこにはすでに後の「～的」の訓読に用いられるすべての型が現れていたこと。

二、明治十二年前後の翻訳書における「的」の使用状況については、「的」に前接する漢語は二字の漢語に限らないこと。「的」はまだ十分にその文体的な位置を獲得していなかったこと。近代の文体における「的」の定着はおそらく明治十四年の『哲學字彙』以降のことに属すること。

三、明治十二年頃の翻訳書における「的」の用法はまだ他の語との競合関係にあり、明治時代の書き言葉の文体における「的」の位置はまだ確定したものではないこと。これは近代の文体として、連体修飾節における意味的な重層性に相応しいだけの表現を持ち合わせていなかったと言う意味で、近代の書き言葉の文体の未熟さを示していること。

なお、本稿は、前稿 2004 に続くものであるが、現在準備中の、「日本語の連体修飾節に用いられる用語の史的变化について——「スルノ＋名詞」から「～底ノ＋名詞」から「～スルトコロノ＋名詞」へ——」の一部をなすものである。なぜ日本語の連体修飾節においてたえず漢文訓読によってその表現をもたらさなければならなかったのか、本稿で指摘してきたような事実が、日本語の連体修飾節に用いられる用語の史的变化のなかで、どういう意味を持つのか、などは今後の課題として続稿に譲りたい。

参考文献:

- 石崎又造 1936 『『六論衍義』の翻譯と板行について（一）——文化史的に——』『書物展望』第六卷第七號、21-25 頁。
- 石崎又造 1936 『『六論衍義』の翻譯と板行について（二）——文化史的に——』『書物展望』第六卷第八號、64-69 頁。
- 井原徹山 1941 「禪の文字——禪語の文法學的考察、特に品詞篇——」『禪』第六卷、雄山閣、1-123 頁。
- 入矢義高 1983 「禪語つれづれ」『求道と悦樂——中国の禪と詩』岩波書店、120-167 頁。
- 入矢義高 1992 「中国口語史の構想」『空花集——入矢義高短編集』岩波書店、221-243 頁。
- 入矢義高 1992 「白話文と白話小説」『空花集——入矢義高短編集』岩波書店、244-249 頁。

- 大槻文彦「文字の誤用」『復軒雜纂』廣文堂、明治三十五年十月發行、274-283 頁。
- 曹 廣順 1995『近代漢語助詞』語文出版社。
- 田島鏡堂 1978『正法眼藏の國語學的研究資料編』笠間書院影印本。
- H.Maspero 馬伯樂（馮承鈞譯）1944「晚唐幾種語錄中的白話」『中国學報』第 1 卷 1 期、73-91 頁。
- 陳 誼 1999「日中両国語における『一的』について」『国語語彙史の研究』第十八集、和泉書院、329-350 頁。
- 東恩納寛惇 1924「六論衍義に就いて」『史學雜誌』第三十五編第九號、 頁。
- 東恩納寛惇 1932『庶民教科書としての六論衍義』、國民教育社。
- 東恩納寛惇 1943『六論衍義伝』（改訂・増補版）、文一路社發行、『東恩納寛惇全集』8、琉球新報社編、第一書房刊、1-92 頁に所収。
- 堀口和吉 1992「助辞『～的』の受容」『山邊道』第 36 號、59-76 頁。
- 前田 勇 1960「近世上方のはやり言葉—今日なお生きつづけるもの—」『言語生活』第 105 号、43-50 頁。
- 武藤長平 1918「琉球訪書志」『西南文運史論』、岡書院、1926 年、185-203 頁（初出：『歴史地理』大正七年 号）。
- 山田 巖 1961「発生期における的ということば」『言語生活』第 120 号、56-61 頁。
- 山田孝雄 1935『漢文の訓讀によりて傳へられたる語法』宝文館。
- 横關了胤 1944『瑩山禪師傳光録』解説、『瑩山禪師傳光録』岩波文庫、岩波書店、331-339 頁。
- 李 長波 2003「日本語文体史資料としての中世禪宗仮名法語の研究—連体修飾節に用いられる「～底（ノ）」を中心に—」平成 10～14 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（A）118『古典学の再構築』研究成果報告集 VII『伝承と受容（日本）』（文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（A）「古典学の再構築」総括班）、2003 年 3 月、12-25 頁。
- 李 長波 2004「近世仮名法語と近代文学における「～底（ノ）」について」*Dynamis*, VOL.8（京都大学人間・環境学研究科文化環境言語基礎論講座）、2004 年 10 月、162-177 頁。
- 呂 叔湘 1943「論底地之辨兼及底字的由來」、『漢語語法論文集』中国科学院語言研究所編輯、科学出版社出版、1955 年、51-58 頁。
- 和田 清 1925「明の太祖の教育勅語に就いて」『白鳥博士還曆記念東洋史論叢』、岩波書店、885-904 頁。